

# シェイクスピアとジェンダー：序説

浜 名 恵 美

## I. 本論の目的

本論は、近代初期イングランドの文化およびシェイクスピアのテキストに見出されるジェンダーを理解するために新しい視点を提起して、この問題を考察する論文の序説の一部である。ここでの主要目的は、論文をまとめるために必要な手続きとして、ジェンダーに関する先行研究と最新動向を批判的に検討することである。

## II. ジェンダー研究の概観

ジェンダーという用語は、文学・文化研究および批評において頻繁に使用されている。しかし、非常に論議を呼んでいるものであり、欠くことのできない概念であると同時に捕らえがたい概念でもある。実は、ジェンダーの統一的な定義も理論もいまだにないのである。<sup>1</sup>ジェンダーを規定することに関わる複雑

---

<sup>1</sup> David Glover and Cora Kaplan, *Genders* (London: Routledge, 2000) ix-xxxiv 参照。

日本でもようやく 2000 年 7 月に、文部科学省科研費期限付き特別分化細目として「ジェンダー」の採用が決定した。科研費公募要領から一部を引用しておく。「性差（セックス）は人類を明確に二分するものではない。にもかかわらず男／女の二項対立的な区分は、社会・文化における諸関係を構成する基本的な要素として機能しており、女性学はこの男／女の二分法に『ジェンダー』という語をあてた。セクシュアリティや表象など、従来は学問研究の主題とされにくかった種々の対象の考究が、女性学や、その影響のもとに成立した男性学およびジェンダー研究によって、一段と進展することが望まれる。」この細目が 3 年間（平成 13 ～ 15 年）の時限を越えて定着するためには、多数の応募があることが望ましいとされる。

女性学とフェミニズムから起こったジェンダー研究は、女性学とフェミニズムで分析されたジェンダー概念を再考するだけでなく、その限界や問題点を指摘して、新たな可能性を模索している。ジェンダー研究の分野のほうが、女性学とフェミニズムより広いという見方もある。しかし、女性学およびフェミニズムは、ジェンダー研究の影響を受けて変化発展しているので、両者を截然と区別することはできない。なお、ジェンダー研究（またはジェンダー学）という用語を用いることは、政治的な論争を巻き起こさず「とても魅力的」ではあるが、女性学とフェミニズムの政治的活動の中核を崩壊させるものであるし、現時点では男性学は「男性による、男性のための、男性についての学問」にとどまっており、男性はとくに女性が蒙っている性差別の解消のために何ができるかという問題と十分に取り組んでいないと主張して、ジェンダー研究という名称に批

性について、田崎英明が簡潔にまとめている。

ジェンダーはおそらくひとつの線分によっては規定しえない。ジェンダーはただひとつの装置でもなければ、さまざまな装置〔父権制や資本主義、家族、国家、ネーション、言語等〕への身体のある一定の組み込み方でさえない。ジェンダーは、たしかに装置への身体を組み込みに関わっているが、何に関してジェンダーが規定されるのかは、それぞれの装置ごとに見ていかねばならないだろう。ある装置では、ジェンダーは欲望に関して規定されているかもしれない。だが、別の装置では、出産に関して規定され、さらに別の装置では、ジェンダーを規定する線分が育児であり、ある場合にはそれは賃労働、というぐあいである。<sup>2</sup>

一般には、セックス（性別）は、性生殖器の差異をもとにしたオスかメスか、男か女かを指す。（この生物学的な二分法もまた、確かなものではない。両性具有者、性的自己同一性障害者などがいるだけでなく、各個人のセックスは、実は多様だからである。「生物学的に極端な『男』という軸と極端な『女』という軸を立てれば、私たちの性は、性生殖器、ホルモン、性染色体といった要素から見て、この両極端のあいだのどこかに位置するという視点で把握することもできる」<sup>3</sup>、と伊藤公雄が述べているが、的を射た発言であろう。）これに対して、ジェンダーは、一般に、男女の間に存在しているイデオロギーにかかわる関係や物質の関係、あるいは「男性性」と「女性性」というカテゴリーに配分される役割、行動、価値を指す。ジェンダーは、文化的（社会的、歴史的）に構築されたものであり、「男らしさ」や「女らしさ」の規範は各時代や各文

---

判的な女性学者もいる。ダイアナ・レナード、「女性学の可能性 イギリスにおける女性学の流れ」（富士谷あつこ、伊藤公雄監修、日本ジェンダー学会編、『ジェンダー学を学ぶ人のために』、京都：世界思潮社、2000）36-58 参照。しかし、性差別的に正に積極的な立場をとる男性でも、大多数が女性だけで組織された女性学やフェミニズムの集会に出席することにはたいいてい抵抗を示すだけでなく、女性の中にもそうした抵抗があることを私は見聞してきた。したがって、女性学やフェミニズムという枠の中で男性の意識を変革する理論や方法を探求することに限界がある以上、あるいはその枠の中で変革の理論や方法を構築しても、枠外の社会で変革が容易に進まない以上、私自身は、必要に応じてフェミニズムという用語を用いることもあるが、ジェンダー研究という名称を用いて、できる限り多数の女性と男性に参加とジェンダー問題への理解を促し、変革への道を着実に歩む方が建設的であると考える。

<sup>2</sup> 田崎英明、『ジェンダー／セクシュアリティ』（東京：岩波書店、2000）11。

<sup>3</sup> 『ジェンダー学を学ぶ人のために』7。

化の展開に対応して変化する。「男らしさ」、「女らしさ」というのは、先天的な特徴ではない。だが、あらゆる社会と文化で、本質的に「男の(male)」、「女の(female)」ものだとされている一定の感情的、心理的な特徴があるとされる。

(「文化」もまた非常に定義しにくい用語であるが、ここでは、「ある時代の集団が生み出す知的活動全体や生きざま」、「人間が生活する世界に適応したり、それを変貌させたりするうえで、利用したり学習したりする行動の観念の体系」であるとしておく。)セックスとジェンダーもまた先天的に一致するものではないのだが、解剖学的・生物学的に男または女に生まれた個人は、通常、それぞれの性に適した「男らしい(masculine)」または「女らしい(feminine)」特質や行動を発達させるように期待されたり強いられる。社会と文化には、意識的であれ無意識的であれ、ジェンダーに基づく固定的な決めつけや偏見が存在しており、結果としてジェンダーによる偏向もまた存在している。これが、「ジェンダー・バイアス」と呼ばれるものである。<sup>4</sup>

ジェンダー研究の目的は、第一にジェンダーについての理解を深めることであり、第二に、それを通して、ジェンダー・バイアスによるさまざまな差別や排除の構造を是正して、ジェンダーにとらわれない社会と文化を作り出すことである。ジェンダー研究の出発点になるのは、1960年代に欧米で台頭した「第二波フェミニズム」である。それまでのフェミニズムは、主に、市民的・法的権利における男女平等の要求や、女性の労働権とそれを可能にする社会サービスの充実の要求を大きなテーマとして掲げた。しかし、第二波フェミニズムは、それまでの運動をさらに進めて、日常生活のあらゆる領域において、父権制または男性優位の構造が存在していることを指摘して、セックスとジェンダーの区別を主張したのである。とくに注目すべき傾向として、第二派フェミニズムが、男女の差異をできる限り縮小しようとして、セックスよりもジェンダーを重視したことであった——この傾向は現在でも残っている。ジェンダーの概念が拡大されたのである。身体とその機能さえも社会と文化との相互作用によって形成されることを明らかにするような主張や証拠が集められた。このようにセックスをジェンダーの概念の中に包括する傾向は、結果として、二つの概念の区別をなくすことになる。セックスという概念の「消滅」は、言葉と事物との区別を切り崩すことをめざす社会・文化理論における「言語論的転回」(現代思想の文脈では自己完結した「意識」から公共的な「言語」へという議論の

<sup>4</sup> 『ジェンダー学を学ぶ人のために』2-3.

土俵の転換)によって、さらに強化された。

第二波フェミニズムから多数の学派が派生したが、その中でも脱構築(ディコンストラクション)を取り入れたフェミニズムは、ジェンダーというカテゴリーを優位に置く効果をもっている。とくに、哲学者ジュディス・バトラー(Judith Butler)の著作がよく知られている。彼女は、自然と文化の二項対立、あるいはセックスという事実がまずあって、次いでジェンダーが作り出されるという考え方に異議を唱えた。バトラーに言わせれば、文化的に決定されているジェンダーという装置がまずあって、そこから生物学的な事実としてのセックスすら決定されてしまうのだ。<sup>5</sup>

バトラーのジェンダー概念は、きわめて抽象的な身体概念に基づき、特定の時代および状況において、さまざまなことを経験する具体的な身体のことを十分考慮していない点が批判されている。<sup>6</sup>にもかかわらず、その概念は、1990年代以降のジェンダー研究に大きい影響を及ぼしている。セックスとジェンダーの関係の理解に、重大な転回をもたらしたのである。所与の文化には男性性、女性性というジェンダーが最初にあり、その構成員は、その文化で「本当の男」または「本当の女」として通るようにジェンダーをパフォーマンス(行為、遂行、実演)し続けているうちに、「男性」または「女性」になるというのだ。生まれたときに備わっている性器がセックスを決定すると通常考えられているので、それが後天的に獲得されるという考え方は非現実的なものに思えるだろう。しかし、バトラーが、ジェンダーが「パフォーマティブ(performative)」であることを暗示する点はとくに注目される。「パフォーマティブ」とは、もともとイギリスの哲学者ジョン・L・オースティン(John L. Austin)が提唱したスピーチ・アクト理論の概念である事実述定文に対する遂行文のことである。これをジェンダー理論に応用し、バトラーは、ジェンダーもまたパフォーマティブとして考えることを提唱する。ジェンダーは「何であるか」によってではなく、「何をするか」によって決定されると考えられるからである。ジェンダーは、先天的に決まったものではなく、行為によって構築される。ジェンダーの

<sup>5</sup> Judith Butler, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity* (New York: Routledge, 1990) 6-7. なお、同年に、フーコーの『性の歴史』に影響を受けて、1990年代のセックス、ジェンダーおよび身体の研究に大きい影響を与えたもう1冊の本が出版されている。Thomas Laqueur, *Making Sex: Body and Gender from the Greeks to Freud* (Cambridge: Harvard UP, 1990).

<sup>6</sup> See Toril Moi, *What Is a Woman?: And Other Essays* (Oxford: Oxford UP, 2000) 33-34, 52-55, 73-76.

「パフォーマンス理論」によれば、あらゆる発話はなんらかの意味でパフォーマンスティヴと考えられる。「したがって、パフォーマンスティヴの行為としてのパフォーマンス（言語運用）は意図的に『演じる』ことではなく、さまざまな社会的コンテクストと関係し、ときにそれら諸関係を書き直すものとしての『行為』を指すことになる」と言われる。<sup>7</sup> ジェンダーは固定したもので一貫したものでないが、変革するのは容易ではない。だからこそ、その見せかけの安定性をゆるがすために、脱構築的な戦略を駆使した概念や理論が有効でありうるのである。

セックスとジェンダーを区別する必要があるのかどうかは、ますます疑問に付されている。ジェンダーの理論家たちのこの問題への答えは分かれている。区別は必要であるという立場もあるし、無用だとする立場もある。しかし、バトラーのように事実上無用であるという立場の脱構築派の理論家ですえ、明白に、あるいは暗黙のうちに、区別を維持していることが指摘されている。<sup>8</sup> セックスとジェンダーという用語は、一定の文脈では、二項対立的な意味で使用され続けているのである。この区別を保たざるをえない理由があるのだ。たとえばセックスさえも作りあげられて維持されるものだとしても、またセックスとジェンダーを厳密に区別することに理論的な困難が伴っても、あらゆる社会は、生殖と出産 (reproduction) という現代の科学技術をもってしても避けられない拘束がある限り、人間の雌雄二つの身体を区別しなければならないし、区別しているのである。セックスとジェンダーを区別することが困難でも、またそうした区別自体を排除したくても、少なくとも、個人が選んだセックスまたはジェンダーから生じる差異と、個人に押しつけられたセックスまたはジェンダーから生じる差異を区別する方法は必要であり続けることになるだろう。

ジェンダー研究は、規定、理論、ジェンダー・バイアスの是正の方法、いずれにおいても錯綜している。さらに、ジェンダーに密接に関連している言語からその他のさまざまな事柄（セックス、セクシュアリティ、身体、父権制、資本主義、階級、人種、民族等）にいたるまでどれもが複雑なので、ジェンダーを多角的に理解しようとする、いつまでも決着のつきそうもないさまざまな分野の議論に巻き込まれて、前進することがほとんど不可能になる。そこで、

<sup>7</sup> 川口番一、岡本靖正編、『最新文学批評用語辞典』（東京：研究社、1998）212。

<sup>8</sup> Sonya Andermahr, Terry Lovell, Carol Wolkowitz, eds., *A Glossary of Feminist Theory* (London: Arnold, 2000) 103 参照。

そうした理論や方法に関する活発な議論が進行しているという現実を認めた上で、シェイクスピアのテキストの分析に着手するために、本論でとりいれる基本方針と作業仮説を述べておくことにしたい。1) ジェンダーは何であるのかという規定に関する問題に取り組むよりも、ジェンダーはどのように作用しているのかという実際的な問題について考察する。2) セックスとジェンダーは区別できるのかできないのかという問題に関しては、両者の区別がつかないような局面があることを認めるが、原則として区別はあるという立場をとる。3) ジェンダーに関しては、とくにジェンダー・バイアスを是正する目的のために、構築主義の立場にたつ。4) セックスが先かジェンダーが先かという鶏と卵のアポリアのような議論、ならびにセックスも構築されたものなのかという議論に関しては、態度を保留する。セックスも構築されたものだという主張には、一定の説得力があるのだが、完全に受け入れるためにはもっと多くの論拠が提示されねばならない。5) ジェンダーの作用の仕方を理解するために新しい視点を導入する予定だが、ジェンダーのパフォーマンス理論を参考にすることもある。6) 各個人の人生は個々の自由な選択にゆだねられるべきだということを認めた上で、ジェンダーにとらわれない社会への転換を期待する。しかし、ジェンダーのない社会がありえるという「空想的な」立場はとらない。ジェンダー問題を扱うのが非常に難しい理由のひとつは、ジェンダーのすべてが、常に強制されたものでもなければ排除されるべきものでもないことである。ジェンダーのない社会と文化は、おそらく、今後ともありえないだろう。ジュディス・バトラーが『ジェンダー・トラブル』(10周年記念版、1999年)の序文で、またその他多数のジェンダー研究者が示唆しているように<sup>9</sup>、ジェンダーがもたらす差別や排除の構造は是正する必要があるがあっても、ジェンダー自体がまったくなくない社会と文化を構想することはできないのだ。ジェンダー研究は、ジェンダーの構築のされ方や作用の仕方を考察して、どのような変化をそこに起こすことが可能かを問い続けている。<sup>10</sup> この取り組みの真価が問われるのは、これからである。

<sup>9</sup> Judith Butler, *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity* (10th anniversary ed.; London: Routledge, 1999) vii-xxvi.

<sup>10</sup> David Glover and Cora Kaplan, *Genders* 157-160 参照.

### Ⅲ. シェイクスピアとジェンダー

本研究が対象とする近代初期イングランドの文化およびシェイクスピアを代表とする演劇は、セックス、ジェンダー、そして身体について考察し直すためにも注目されている。「英国ルネッサンス」と呼ばれることもある当時は、言うまでもなく、多数の劇作家や詩人が活躍したが、本研究ではシェイクスピアに焦点を絞って、多角的かつ深く考察することにしたい。）前項で触れたように二分法の正当性が疑問視されているとはいえ、現代が、基本的に、セックスは二つで、ジェンダーも二つという体制だとすれば、シェイクスピアの時代は、極端に言えば、性は一つで、ジェンダーは三つだったと言える。近年提出された有力な仮説によれば、近代初期から 18 世紀までの医学では、男女の性器は基本的に同一で、違いは外にさらされているか体内に隠されているかだけ、つまり膣はペニスの形をしていて、それが内蔵されているだけだと考えられていた可能性がある。それに対して、ジェンダーの方は、「男」、「女」、「両性具有者」の三つだった。この「ワン・セックス・モデル」に基づいた主張には、多少の批判が起こってもふしぎではない。<sup>11</sup>しかし、重要なのは、セックスもジェンダーも決して安定したものでない、と十分認識することである。

シェイクスピアの時代に女性の職業俳優は存在せず、変声期前のジェンダーの曖昧な——両性具有的な——「少年俳優(boy player)」が女性登場人物を演じた。つまり、シェイクスピアの芝居は異性装演劇であった。とくに注目されるのは、『お気に召すまま』、『十二夜』、『ヴェニスの商人』のように、ヒロインが異性装をして大活躍する恋愛喜劇である。例えば、『お気に召すまま』のロザリンドは、若い騎士オーランドーと相思相愛の仲になるが、アーデンの森で男装してギャニミードと名乗り、オーランドーにギャニミードをロザリンドだと思わせて求愛の練習をさせる。それどころか、ロザリンド／ギャニミードの方が、オーランドーを積極的に口説いているふしもある。ここでは、少年俳優が女装して女役を演じて、その女性登場人物が今度は男装して男のふりをするという、入れ子式の構造をしている。しかも、少年が演じたロザリンドが男

<sup>11</sup> 1980年代後半から新歴史主義とクィア理論の台頭があり、現時点では「ワン・セックス・モデル」が支配的になっているように見えるが、これに対する批判もある。Michael Shapiro, *Gender in Play on the Shakespearean Stage: Boy Heroines and Female Pages* (Ann Arbor: U of Michigan P, 1996) 1-11; Janet Adelman, "Making Defect Perfection: Shakespeare and the One-Sex Model," in *Enacting Gender on the English Renaissance Stage*, ed. Viviana Comensoli and Anne Russell (Urbana: U of Illinois P, 1999) 23-52.

装して名乗るギャニミードという名前が、元来、大神ゼウスの愛人であった美少年の名前であることを想起すれば、舞台上のやりとりは明らかに同性愛的な要素を含んでもいる。こうして、セックス、ジェンダー、身体、セクシュアリティという問題が、入り組んで現れて、舞台上の登場人物も観客も認識が攪乱される。シェイクスピアのテキストは、ジェンダー研究の宝庫なのである。

俳優とジェンダーに関してもうひとつ興味深いのは、服装との関係である。スティーヴン・オーゲル(Stephen Orgel)は、少年が劇場で女性の代わりにされるのは、性的に曖昧であるからではなく、「服装が女性をつくり、服装が男性をつくる。衣装こそが本質である」<sup>12</sup> からだと主張する。性差は服装しだいという大胆な仮説である。この主張は、あきらかに極端すぎる。正確には、化粧、髪型、発声、所作などの補助がなければ、衣装だけで異性をそれらしく見えるように演じることはできないからだ。とはいえ、ジェンダーが本質的なものではないことは、ジェンダーにとらわれない文化を目指す立場からは、いくら強調してもしすぎることはない。ジェンダー構築の問題は、オーゲルが適切に指摘しているように、現在も進行中の文化の歴史にかかわる。

問題の深層は、ジェンダーが近代初期の文化(cultures)によっていかに構築されたかということである。これを問うことは、ジェンダーが私たち自身の文化によっていかに構築されているかを問うこと、そして——さらに動揺させられることになるが——なぜジェンダーはそんな形で構築されているのか、を問うことにもなる。どんな答えを出しても、問題は残るだろう。<sup>13</sup>

近代でも現代でも、ジェンダー問題には唯一の解決策がないとしても、シェイクスピアのテキストの中で、この問題を追究することは重要である。シェイ

<sup>12</sup> Stephen Orgel, *Impersonations: The Performance of Gender in Shakespeare's England* (Cambridge: Cambridge UP, 1996) 104. オーゲルの本は邦訳されている。本文で引用した英語の文献の中で邦訳のあるものは、参考にさせていただいた場合もあるが、特に断っていない限り自分の訳を使った。異性装および異性装演劇の力学に関して、以下も参照。Shoichiro Kawai, *Disguise in Renaissance Drama: A Study of the Dramatic Representation of an Alternative Self*, unpublished Ph.D dissertation, U of Tokyo, 1997, esp. chap. 4 Cultural Background of Cross-Dressing. 楠明子、『英国ルネサンスの女たち——シェイクスピア時代における逸脱と挑戦』(東京:みすず書房、1999) 1章 男装する女たち。

<sup>13</sup> Orgel 3.



クスピアのテキストが、現代において自然なものだとされているジェンダーを、脱自然化する (denaturalize) ことに貢献する可能性があるからだ。ジェンダーが、本質的なものではなくても、各文化の既成の規範に基づいて反復されて固定されてしまいやすい構造をどう変換するのか、またジェンダーを現実の社会と文化の中でどう変革するのか、という大きい課題は残る。しかし、シェイクスピア演劇こそ、ジェンダーの仮装性に立脚した芝居にほかならないという事実は、改めて今日的な意味をもち、この分野の研究を発展させることがますます重要になっている。<sup>14</sup>

ジェンダー研究の最近の動向で重要なものをさらにあげれば、男性性についての関心の高まりとなる。文化的構築物としての男性性は従来、十分に分析されてこなかった。その複雑性が理解され、ようやく本格的に研究されはじめた。<sup>15</sup>

<sup>14</sup> ジェンダー研究を応用した多数のシェイクスピア研究書は、本論の各章で言及されるので、ここでは重要なジェンダー論の選集を4冊だけあげておく。Deborah E. Barker and Ivo Kamps, eds., *Shakespeare and Gender: A History* (London: Verso, 1995); Stephen Orgel and Sean Keilen, eds., *Shakespeare and Gender* (New York: Garland, 1999); Viviana Comensoli and Anne Russell, eds., *Enacting Gender on the English Renaissance Stage* (Urbana: U of Illinois P, 1999); Anna Tripp, ed., *Gender* (Hampshire: Palgrave, 2000).

なお、ジェンダー研究と密接に関係しているフェミニズム批評を応用した多数のシェイクスピア研究書も、本論の各章で参照されるので、ここでは文献目録の書物と概説的文献だけあげておく。Philip C. Kolin, *Shakespeare and Feminist Criticism: An Annotated Bibliography and Commentary* (New York: Garland, 1991)は、1988年までの関連文献を扱っている。Jonathan Dollimore, "Critical Developments: Cultural Materialism, Feminism and Gender Critique and New Historicism," in *Shakespeare: A Bibliographical Guide*, ed. Stanley Wells (New ed.; Oxford: Oxford UP, 1990) 405-28; Heather Dubrow, "Feminisms, Gender Studies, Gay and Lesbian Criticism, Queer Theory," in *The Riverside Shakespeare*, gen. ed. G. Blakemore Evans (2nd ed.; Boston: Houghton Mifflin, 1997) 44-47; Coppélia Kahn, *Roman Shakespeare: Warriors, Wounds, and Women* (Feminist Readings of Shakespeare series; London: Routledge, 1997) Ann Thompson's preface, xiii-xv; Dymphna Callaghan, ed., *Feminist Companion to Shakespeare* (Oxford: Blackwell, 2000) part 1, 1-41.

<sup>15</sup> Tripp 11-12. シェイクスピア研究の分野では、Coppélia Kahnの *Man's Estate: Masculine Identity in Shakespeare* (Berkeley: U of California P, 1981)が、男性性に関する初期の重要著作である。専門家だけでなく一般人をも読者の対象とするシリーズ (Oxford Shakespeare Topics series) の1冊として、Bruce R. Smith, *Shakespeare and Masculinity* (Oxford: Oxford UP, 2000) が出版されたことによって、男性性への関心の高まりが裏付けられるだろう。Robin Headlam Wells, *Shakespeare on Masculinity* (Cambridge: Cambridge UP, 2000) も参照。なお、ドイツのケルン大学を拠点として、英米文学に関連したフェミニズム理論、文学批評およびジェンダー研究のインターネットにおけるデータベースを構築しているチーム (the gender Inn team) が、男性性研究 (masculinity studies) というカテゴリーを設けているのは注目される。書誌目録には、1987年から1999年までに出版された14の著作が収録されている。"Masculinity Studies," Selected Bibliography, *gender Inn*, the Women's and Gender Studies Database on the Internet, <http://www.genderinn.uni-koeln.de>, online, 5 June 2001.

フェミニズム批評の立場からなされるジェンダーの研究でも、女性性に劣らず男性性も検討の対象とされてきてはいた。しかし、男性性は、もっぱら批判の対象となり、女性性は、男性優位社会の中で規定され、体制化され、内面化されてきたことが問題となった。つまり、従来の研究では、女性性のほうがより大きな問題となっていたのである。近代初期イングランドの演劇研究の分野でも、男性性をめぐる研究が進展しつつある。男性性もまた、父権制文化のなかで抑圧的に作用することが明らかになってきた。父権制文化によって構築された男性性の理想は、元来、主体にさまざまな不安をもたらす。近代初期イングランドの「不安な男性性」を考察したマーク・ブライテンバーグ (Mark Breitenberg) が、シェイクスピアの詩と演劇のテキストに見られる男性性を分析して、彼の取り上げ方が、たいてい、同時代の男性作家のそれよりも「複雑で微妙である」、もしくはジェンダーとセクシュアリティに関する当時の文化の不安をより豊かに示していると述べている。<sup>16</sup> 本論では、シェイクスピアのテキストに見られる男性性についても、男性性研究という新しいパースペクティブを取り入れて、考察しなおすことにしたい。

#### IV. ジェンダー研究とアプロプリエーションの意義

シェイクスピアのテキストをジェンダーというテーマから読み直すとき、重大な意義をもつ理念および方法がアプロプリエーション ("appropriation") である。この批評用語の定義について論じてから、シェイクスピア研究と批評におけるアプロプリエーションの歴史と意義について論じることにする。

アプロプリエーションという用語は、現代批評において、それぞれセックスとジェンダー、セクシュアリティ、人種・民族等の点でマイノリティー（必ずしも人数の点ではなく、権力の配分の点からの「少数派」）の立場に置かれた者たちの復権を目指す営みである、フェミニズム、ゲイ・レズビアン研究、ポスト植民地批評などに関連して、よく使用される。さらに、これらの営みと密接に関わっているが、現代文化のイデオロギー性やヘゲモニーの問題、さまざまな差異とアイデンティティの構成等を探求しているカルチュラル・スタディーズでも、この用語は、よく使用される。アプロプリエーションは、領有、専有(化)、(専有)利用、転用、盗用などと訳されているが、ひとつの確立した

<sup>16</sup> Mark Breitenberg, *Anxious Masculinity in Early Modern England* (Cambridge: Cambridge UP, 1996) 28.

訳語はない。私物化するためにたいていは許可なく何かを獲得するという意味だが、「現代批評においては、文化資本を乗っ取り、本来の文脈とは違った形で用い、もともとの文化資本の支配者に対抗することを言う」。<sup>17</sup> ほとんどあらゆるものが商品化されうる資本主義のもとで、領有したものが一種の商品として流通するようになり、転倒的で対抗文化的な可能性が失われ、権力を持つ側に再び領有される危険があると指摘することはできる。さらに、資本主義のグローバル化のもとで文学の商品化もまた避けられないことだとしても、どのような内容と形式でなら容認できるのか、という疑問は残る。にもかかわらず、アプロプリエーションという用語が、現代批評の諸理論において、理念、方法、戦略として威力を発揮してきたことは明白である。

シェイクスピア研究と批評においても、アプロプリエーションは駆使されてきた。『シェイクスピアとアプロプリエーション』の編者の一人、クリスティー・デズメット (Christie Desmet) に言わせれば、「アプロプリエーション研究」の出発点となるテキストは、ミシェル・フーコー (Michel Foucault) の「作者とは何か」(1969: 英訳 1979 年) である。<sup>18</sup> フーコーは、あらゆる「言説はアプロプリエーションの対象である」と措定した。<sup>19</sup> テキストの起源となる創造者という作者 (author) の概念は否定され、作者は歴史と言説のなかで構築されたひとつの機能にすぎないとされる。テキストの意味は、文化のさまざまなコードや言説実践との関係によってもたらされる。デズメットによれば、「シェイクスピアは作者機能『シェイクスピア』(the author-function "Shakespeare") になるのだ。」<sup>20</sup> ここでは、テキストの最終的統括者として「権威 (author-ity)」を帯びるようになった作者 (authorship) という概念の脱神話化が問題となっている。これについては、言うまでもなく、ロラン・バルト (Roland Barthes) の「作者の死」(1968: 英訳 1977 年) という、フーコーのテキストに先行す

<sup>17</sup> 川口喬一、岡本靖正編、『最新文学批評用語辞典』(東京: 研究社、1998) 288. Joseph Childers and Gary Hentzi, eds., *The Columbia Dictionary of Modern Literary and Cultural Criticism* (New York: Columbia UP, 1995) の邦訳、『コロンビア大学現代文学・文化批評用語辞典』(東京: 松柏社、1998) 68-69 も参照。

<sup>18</sup> Christy Desmet and Robert Sawyer, eds., *Shakespeare and Appropriation* (London: Routledge, 1999) 4-5. ちなみに、この論文集は理論と実践における多様なアプロプリエーション (アダプテーションを含む) を扱っているので、題名は複数形 (Appropriations) の方が適切であろう。

<sup>19</sup> Michel Foucault, "What Is an Author," in *The Foucault Reader*, ed. Peter Rabinow, trans. Josue V. Harari (New York: Pantheon Books, 1984) 108.

<sup>20</sup> Desmet and Sawyer 4-5.

の重要論文がある。<sup>21</sup> しかし、シェイクスピア研究と批評に及ぼした影響の大きさを考えれば、シェイクスピア研究と批評におけるアプロプリエーション研究の出発点はフーコーの著作だというのは妥当である。

シェイクスピア研究と批評では、アプロプリエーションに関して保守派と革新派(フェミニズムを含む)との間に論争がある。保守派は、現実の社会を変革することが革新派の究極の目標であるなら、シェイクスピアではなく、他のものを対象にすべきだと主張する。さらに、革新派がシェイクスピアを領有(アプロプリエート)して、近代初期イングランドには存在していない時代錯誤のイデオロギーを作品に押しつけている、と批判する。それに対して、革新派は、文学と社会との力学を重視して、文学研究と批評はこの力学に積極的に関与すべきだと主張する。革新派がアプロプリエーションを行使するとき、シェイクスピアが文化資本であることが暗黙の了解事項となっている。しかも、文化資本の中心的位置を占めているからこそ、改革派のそれぞれの目標が何であれ、シェイクスピアは領有するのに最適の対象となる。アイヴォー・カンブス(Ivo Kamps)が言うように、保守派にも革新派にも、文化資本としてのシェイクスピアが等しく必要なのだ。<sup>22</sup> 実は、保守派自体が、正典(キャンノン)として所有しているシェイクスピアを領有しているのである。これに関連して、高橋康也の主張は引用に値する。

…真の古典はつねに神格化を拒否し、新しい解釈を触発することによって生きつづける。とりわけ俳優の生身をとおして再現される演劇というジャンルでは、すべての作品は上演の時点での「現代劇」なのだ。時代だけでなく、国境も、またジャンルの境界も超えられる。さまざまな国の演劇人のみならず映画人・作曲家・バレエ振付家がさまざまな状況で、「シェイクスピアはわれらの同国人」と宣言する。…[シェイクスピアの作品は]エリザベス朝時代様式に帰ろうとする「正統派」から、「なんでもあり」の現代エンタテインメント派まで、どんな発掘法にも耐えられる稀代の鉦

<sup>21</sup> Roland Barthes, *Image-Music-Text*, selected and translated by Stephen Heath (New York: Hill and Wang, 1977) 142-48.

<sup>22</sup> Ivo Kamps, "Alas, poor Shakespeare! I knew him well," in *Shakespeare and Appropriation*, ed. Christy Desmet and Robert Sawyer 20. Kamps, ed. *Shakespeare Left and Right* (London: Routledge, 1991) 1-12 も参照。

山なのだ。<sup>23</sup>

「稀代の鉱山」とは、文化資本のことにほかならない。

シェイクスピア研究と批評の歴史は、たいてい相互に批判的なアプロプリエーションの連鎖によって成り立っている。「文化資本の乗っ取り」と定義された批評用語のアプロプリエーションは、ラテン語の動詞"appropriare"（「自身のものにする」）を語源として、通常は、「(特定の目的のための) 充当、割り当て、流用」、「(無断) 専有、私有；横領」などを指す。ここで、A と B という二陣営があり、対象 X ——例えば、資金、土地、制度——に関して、対立していると仮定しよう。すると、A 陣営が、自分の目的——正義、信念、利益など——のために、X を「充当」または「専有」すれば、B 陣営からは「流用」または「横領」として非難されるだろう。要するに、所有（権）をめぐる果てしない闘争が生じるのだ。A と B を保守派と革新派に置き換えれば、シェイクスピア研究と批評におけるアプロプリエーション論争が、両派の「シェイクスピア」という文化資本の所有（権）をめぐる闘争であることが明らかになる。さらに、あらゆる領有が有意義なものとは限らないとしても、領有および再領有の循環によって、シェイクスピア研究と批評の生命が維持されていることも明らかだろう。

フェミニズム批評によるシェイクスピアのアプロプリエーションは、ジェンダー、父権制、抑圧等の概念を用いて、ステレオタイプな解釈を提出している、とブライアン・ヴィッカーズ(Brian Vickers) は批判する。<sup>24</sup> こうした保守派による批判にもかかわらず、カーンブスが教育現場での経験に基づいて述べていることに注目すべきである。

<sup>23</sup> 高橋康也、「『同時代』ということ——はしがきに代えて——」（高橋康也、大場建二、喜志哲雄、村上淑郎編『研究社シェイクスピア辞典』、東京：研究社、2000）iv。

<sup>24</sup> Brian Vickers, *Appropriating Shakespeare: Contemporary Critical Quarrels* (New Haven: Yale UP, 1993) 325-71. 著者が批判対象にしたのは、フェミニズムだけでなく、脱構築、新歴史主義、文化唯物論、精神分析、マルクス主義、キリスト教的解釈等の広範囲におよぶ。彼の立場から意外ではないが、女性研究者を中心として行われている、当時の女性を書いた作品の掘り起こしという実証的作業は学術的な「刷新」として評価している。

ちなみに、フェミニズムの領有に深刻な問題があるとすれば、保守派が指摘するような、正当性に関するものではない。フェミニズムの領有によって、シェイクスピアの文化的権威を再強化してしまいかねない陥穽のほうである。

シェイクスピアを時代遅れになることから救うために、フェミニズム批評ほど貢献してくれた批評運動はない。シェイクスピアの名前が現代の関心事という文脈において強力に喚起されなければ、シェイクスピアが新しい世代の学生たちに生き生きとしたものであり続けられるはずがない。<sup>25</sup>

シェイクスピアのテキストに見出されるジェンダーを研究する者たちが、そのテキストを歴史的またはイデオロギー的な「古さ」や「誤り」のために葬り去ることを望まず、そうした「古さ」や「誤り」を保守派のように歴史的特殊性によってただ「説明」や「解明」するだけでも満足できず、現代の関心事と深い関わりをもつ生き生きとした詩と演劇のテキスト（文化テキスト）であり続けさせたいと欲するならば、彼のテキストは、今後とも、フェミニズム批評ならびにジェンダー研究のアプロプリエーションに応じ続けねばならないのである。

ジェンダー研究のアプロプリエーションは、シェイクスピア研究に大きい変革をもたらした。他方で、セックスやジェンダーの問題を中心的に扱うことへの異議申し立ても強まった。従来フェミニズム批評が、男性優位社会で「他者」と位置づけられる「女性」に注目したのに対して、階級、人種、民族、植民地、同性愛など、多数の「他者」の存在と表象もまた大きな問題となってきたのである。フェミニズム批評の発展に伴う内部からの要求はもとより、こうした傾向に応じるためにも、フェミニズム批評およびジェンダー研究は多様性を増し、折衷性の度合いを増している。

「シェイクスピア」を領有するとき、フェミニズムはさまざまな理論と方法を用いる。フェミニズム批評自体が、他の批評理論を領有することがある。フェミニズムの問題事項に関与していない諸理論を乗っ取り、みずからの目的のために変容させて使うのである。フェミニズム批評およびジェンダー研究は、柔軟な姿勢を維持して、現実の社会や文化の変化に常に開かれたものでなければならない。だが同時に、フェミニズムにとってアプロプリエーションとは、「なんでもあり」の娯楽や言葉遊びにとどまってはならず、現実社会の改革を求める批判力を保持しなくてはならないだろう。<sup>26</sup>

<sup>25</sup> Kamps, "Alas, poor Shakespeare! I knew him well," 26-27.

<sup>26</sup> 拙論, "Whose Body Is It Anyway?-A Re-Reading of Ophelia," in *Hamlet and Japan*, ed. Yoshiko Uéno (New York: AMS Press, 1995) 143-54 は, "feminist appropriation" の一例である。Joost Daalder

## V. 結び

ジェンダーの既存の構造を変えるためには、ジェンダー研究の理論と方法を一層発展させる必要がある。さらに、女性も男性も、認識と行動の諸領域で変わらなくてはならない。シェイクスピアの時代とテキストに見られるジェンダーは、解決された過去の問題ではない。微妙な変化を示しながらも、現在でも強固に残っている。それは私たちに密接に関わるのである。

今後の多文化世界においてシェイクスピアのテキストが、世界中の異なる文化の人々にとって有意義なものとして存続するためには、批評、上演、映画、創作等のあらゆる領域で、多様なアプロプリエーションが実践される必要がある。シェイクスピアの文化資本としての価値は変動しても、そのテキストは、今後も世界各地でさまざまな方法によって領有され、それぞれの地域と時代に適切な意味をもち続けるだろう。とりわけ、ジェンダー研究によるシェイクスピアの領有に対する期待は大きい。現在も進行中のジェンダーという問題をより深く解明するために、新しい洞察をもたらすからである。本研究の本論でとりあげる予定のテキストのジェンダー研究による領有だけでなく、領有の理論と方法の一層の開発も期待される。シェイクスピアのテキストは、研究者・演劇関係者の果敢なとりくみによって、また新しい世代との関係の中で、斬新な意味と喜びを見出され続けるだろう。

---

が、*Review of English Studies* (Oxford: Oxford UP) ns. vol.48 (1997), no. 192: 529-31 で、拙論に好意的な書評をしてくれたことを、本論文に関連して特筆しておきたい。

フェミニズムおよびその他の立場からのシェイクスピアのアプロプリエーション (appropriations) の必然性と積極的な意義については、以下も参照。Jean I. Marsden, ed., *The Appropriation of Shakespeare: Post-Renaissance Reconstructions of the Works and the Myth* (New York: St. Martin's Press, 1991) 1-10; Thomas Cartelli, *Repositioning Shakespeare: National Formations, Postcolonial Appropriations* (London: Routledge, 1999) 1-23. ちなみに、第7回世界シェイクスピア会議 (バレンシア、2001年4月18日 - 23日開催) のセミナー15のテーマは、"Creative and Critical Appropriations of Shakespeare"であった。